

歌心、3少年漂流記

N・S・P LP 200万枚セールスを記録したスーパーグループ！

ふきのとうの細坪基佳が作詩したシングル「愛のナイフ」がヒットのきざしを見せているN・S・P。今までに発表したアルバムが13枚、そのトータル・セールス枚数が200万枚を突破。コンサートはどこも超満員という実力を誇りながら、いまひとつパツとしなかったグループだが、どうやら、今年あたりはNo.1グループへの道を走っていきそう。そろそろ、時期到来か。すでに70年代の活動の区切りは自分たちなりにつけたという。

「ぼくら、もう6年の活動歴になるでしょ。それで、同期の連中っていうか、長寿グループがどんどん売れてビ

ッグになってゆくのをハタで見ていると、気持ちのあせりがでてきますよ。シングル・ヒットを狙いたいですね。で、ぼくたちなりに70年代の活動にまず、ひと区切りつけようと思つて、去年、全国大都市8カ所のコンサートをやっただけです。バックにシンフォニー19名をつけて、思い切ったことをしたわけです。総勢32名のツアーだから大赤字だったけど、どこも盛り上がり、すごく自分たちの刺激になりました。これからは、コンサートは小さな町をくまなく回ろうと思うし、レコードも作詩作曲は



には、4年ぶりにぼくのソロアルバムも予定で、マルチ的な活動を展開してゆくつもりです」と、リ

ダーの天野滋は張り切っている。ただ、No.1を狙うあまり、自分たちのペースを崩すようなことはしたくないという。あくまで、これまでの6年間がそうだったように、マイ・ペースでいくが、マイ・ペースっていうのは、いつもギリギリのところをやつてないと、マイ・ペースにならないものなんですよ」と、厳しくあろうとする。

あくまでも素朴な心を見失わず…

仕事場では仲が良さそうだが、プライベートの時は口もきかないなんていうグループもあるけれども、N・S・Pの絆はとて強い。仕事の時はもちろんだが、私生活でもいつも一緒だ。たとえば、東京・二子玉川の住人である平賀和人と中村貴之は真夜中、2人してローラースケートで二子玉川の高島屋あたりの道を走っている。平賀はすでに2児の父、片や中村は1児の父。2人ともお父さんなのに、少年のような無邪気な心を見失っていない。で、いまは体力作りも考えて、真夜中のローラースケートになっていくわけ。それと、3人は「少年ジャイガース」という草野球のチームを持っている。

「やっぱり、子供が生まれて大きくなってゆくと、家庭的になってきちゃうんですね。生活が大人しくなるっていうか、テリトリーが狭くなるんですよ。できるだけ、生活のダイナミズムを失わないようにしようと思つてます。いつまでも少年の心でいるっていうのかな」と、中村。

岩手の自然のなかで少年時代を過ごした3人には、素朴な心が今でも残っている。また天野はコマの名人だ。見事な手つきでコマ回しをやつてのけ、子供の頃の遊びの話に3人は目を輝やかす。N・S・Pの歌が素朴なのは、そんな3人の人柄からきている。この頃、その人柄を正確に捉えた4コママンガがファンクラブの会報に載っている。この4コマ、マンガを3人は毎月楽しみにしている。このマンガにN・S・Pの魅力があるのだ。

